

# ミュージカル映画における歌と踊り——作品分析を中心にして

大阪芸術大学 芸術計画学科 教授 田之頭一知

映画という表現ジャンルは、1895年にフランスのリュミエール兄弟がシネマトグラフを用いて『工場の出口』等のフィルム上映を行なったことに端を発する。その後、1927年にアメリカで初のトーキー映画『ジャズ・シンガー』が公開され、映画はまさしくフィルムに刻み込まれた映像と音の同期性に支えられ進展してゆく表現領域としての地位を確立することになる。この映像と音の同期性すなわち並行関係が、映画における音楽の役割を認識させることになったと言ってもよい。ここで注目すべきは、『ジャズ・シンガー』が、そのタイトルからも推察されるように、劇中音楽として歌を取り込んでいたという点である。これは映画が単に音だけではなく音楽そのものを、みずから支える重要な柱として取り入れたということの意味する。すなわち、映画はトーキーとなった時点から、ミュージカル映画的部分を手に入れていたものであり、音をその掌中におさめたときからすでに、或る意味で潜在的なミュージカル映画なのである。ただしこのことは、或る場面で登場人物が歌を口ずさむといったレベルで理解されるべきものではなく、物語の進展とは位相を異にする要素が、音楽を内に取り込むことによって映画にもたらされたということの意味する。このことを示しているのが、まさしくミュージカル・シーンであると言ってよい。本研究はこのような視点に立って、ミュージカル映画における歌と踊りの役割ないし働きを、作品ごとに解釈し分析することに主眼を置くものであるが、ここでは紙幅の関係から、『トップ・ハット』『巴里のアメリカ人』『メリー・ポピンズ』について簡潔に述べるにとどめる。

まず『トップ・ハット』（フレッド・アステア主演、1935）であるが、そのミュージカル・ナンバー、*Cheek to Cheek* に目を向けるならば、盛装したアステアとドレスアップしたロジャースが、ホテルで踊る曲となっている。2人は曲の最初のほうでは、他の宿泊客が踊っているフロアで踊っているが、やがてその場を抜け出て2人だけで踊り始める。このシークエンスにおいては、宿泊客たちに交じって踊る場面では物語の進行とのつながりを保っているが、2人だけになって踊る場面になると、物語展開から離れて、純粋にアステア&ロジャースの踊りを映像化することに専念していると言ってよいようなものになっている。むしろ逆に、2人の息の合ったダンスが、物語展開を呼び込んでくるといったような感じにもなっており、踊りの展開と物語の進行が入れ子構造になっていると言ってもよい。

また、*The Piccolino* という曲では、まずホテルの広間に大勢の男女のダンサーが姿を見せて踊りを繰り広げてゆく。カメラはその踊りを俯瞰ショットで撮りおろし、ダンサーたちの動きによって描き出される構図が提示されてゆく。これをあたかもイントロにしてロジャースが歌い出すが、その歌の内容は、メロディに合わせて歌い踊ろうというもので、歌が終わるとそれに呼応して合唱となり、さらにそれに合わせて群舞となる。群舞が終わるとアステア&ロジャースのダンスとなるが、前曲とは異なり、2人は大勢の観客の

前で踊るかたちになっている。これはすなわち、タップも織り交ぜた2人のダンスこそが、この映画の主軸の一つであるということをはっきりと示すものである。

このように、ミュージカル映画では、歌と踊りを核としてそこに物語が絡んでくると考えることができるが、『巴里のアメリカ人』（ジーン・ケリー主演、1951）もその例に漏れず、作品の主軸は歌と踊りにある。それは映画の最初のほうで、リズという女性の人物紹介を行なう場面に明確に現われている。その場面では、リズの人物描写をするために、彼女自身が幾通りかの踊りを披露するのである。そのダンスは大きくバレエ・スタイルのものとエンターテインメント・スタイルのものに分かれており、この映画のダンス構成が、ヨーロッパ的なバレエとアメリカ的なダップを軸としたものになることが暗に示される。別の言葉を用いれば、この映画が、その2つのダンス・スタイルを柱とし、両者が交わるところに成立するということが示唆されているのである。

上に述べたことから分かるように、ダンスや歌の場面に当該作品の核になるものが示されることが多いが、『メリー・ポピンズ』（ジュリー・アンドリュース主演、1964）においても、*A Spoonful of Sugar* という曲がきわめて重要な位置を占めている。この曲のタイトルである *A Spoonful of Sugar*（スプーン一杯の砂糖）は、子供に対する親の愛情のことであると言ってよい。ここで大切なのは、子供には子供の世界があるということである。この子供の世界は或る意味で魔法の世界であり、それはいわゆる「ごっこ遊び」によって形作られる。しかし、大人になるにつれて私たちはその子供の世界、魔法の世界を忘れてゆく。大人になるとは、そのような魔法の世界を忘却の彼方に押しやってしまうことなのである。この独特の世界を思い出させてくれるものもまた、スプーン一杯の砂糖なのであり、そのことをこの歌はシンボライズしていると考えることができよう。

これまで見てきたように、ミュージカル映画にあっては、歌と踊りの場面が作品そのものの中枢部に位置していたり、作品の中心軸を形成したりする。このことが意味しているのは、ミュージカル映画のミュージカルたるゆえんは、物語展開を担う登場人物（すなわち主人公やそれに準ずる人物）が歌って踊るところにある、ということである。一方で主人公たちが物語を進行させるとともに、他方でその主人公たちが歌い踊るところに、ミュージカル映画のエッセンスがある。台詞や所作による演技がまさしく物語進行を担って物語の展開を推し進めてゆく一方、歌と踊りの場面では、それに付随する音楽が映像世界の外に位置しつつも、私たちは或る意味でそれに違和感を覚えないのであってみれば、ミュージカル映画における歌と踊りは、ドゥルーズの言うように、私たちに「夢」を提供するものと言ってよいであろう。